

重要文化財 台付舟形土器に関する一考察

清田 純一

はじめに

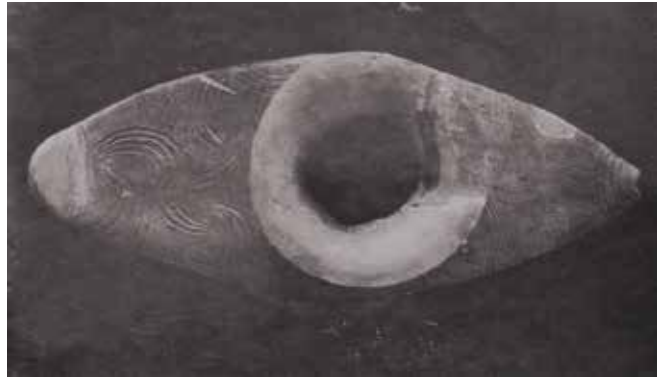
熊本の弥生土器の中にひととき異彩を放つ土器がある。熊本を代表する弥生土器の一つ「台付舟形土器」である。形態・文様とも特異で他に実用土器としての類を見ない。(註1)発見時、無造作に里道の端に置かれていたといい、昭和11年(1937年)頃、隈庄町立隈庄尋常高等小学校(現熊本市立隈庄小学校)の教諭であった池辺キミ氏が通勤途中に採集したものである。その後在野の考古学者小林久雄氏のもとに持ち込まれ、広く知られることとなった。その形態から「弥生式草袋形脚付土器」「舟形注口土器」などとも呼ばれ、昭和16年(1941年)9月24日、昭和8年(1933年)施行の「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」のもと重要美術品に指定された。昭和25年(1950年)に文化財保護法が施行され、指定制度の改正により、いったん指定を解除されたが、再び昭和42年(1967年)6月15日に「弥生式台付舟形土器」の名称で重要文化財に指定された。その後昭和47年(1974年)6月8日付けで「台付舟形土器」に指定名が変更され現在に至っている。

本資料は、文様や形態の特異性から多くの展示会や印刷物によって紹介されてきた。しかしどのような時代背景のもとで創出されたものなのかについて語られたものは少ない。そこで本稿では、資料の観察を通して当該土器の持つ意味を考え、作られた時代における地域の様相について若干の考察を行うこととする。

2 台付舟形土器とは

a) 台付舟形土器の観察

現在、台付舟形土器はあたかも完形品と見間違ふほど精巧に復原されているが、小林久雄氏の資料の中にある当該土器を写した古写真(写真1)から完形品でないことが認められる。この写真によれば、口頸部、脚台裾部、胴部の一部が復原されていると思われ、写真の古さからみて、採集された土器が小林氏のもとに届けられた時点から欠損していたものと思われる。器の多くが残存することから形態の復原については、正確に行われているといえよう。文様についても複雑にヒレ状の弧線が描かれる胴部のほとんどが残存しており、欠損部が多い口縁部内面及び脚裾部外面については単一文様が連続する部分であり、制作時の状況と大きな差異はないと考える。したがって現在復原されている当該土器は制作時の状況に近いものと推察さ



1-1



1-2



1-3

写真1 台付舟形土器(石膏復原部分が見える)

れる。

さて台付舟形土器は、かつて舟形注口土器の名で呼ばれたように、胴部の先端部に注ぎ口と思われる穿孔が見られる。胴部は、ゴンドラ様の形態を呈しており、上下にラップ状に開く口頸部と脚部を接合している。脚部が胴部の中心であるのに対し、口頸部は胴部の中心から注口側に寄せて接合されている。文様は口頸部外面と内面（口縁部を除く）以外にみられる。外面に描かれた文様は、胴部と脚部にみられる3条から5条の沈線によって描かれた緩いヒレ状の弧線と口頸部下端にみられる3条の沈線、脚部上端と裾部への移行部にみられる2条を1単位とする横線（上6条、下8条）及び注口部を囲むように描かれた5条の沈線によって構成される。弧線は単独のものと数個を組み合わせたものがある。胴部上面にみられるものは、4個のヒレ状弧線を組み合わせたもので、あたかも生き物を表現したかのようである。この部分と周辺の沈線のみ深めであることは偶然だろうか。口縁部内面には、5条を1単位とする重弧文が5箇所描かれており、注口部に描かれた沈線同様、使用によるものと思われる磨滅が認められ、実用目的で作成されたことは明らかである。脚部の文様は、上端と下端に描かれた横走る沈線を描いたのち、下端の沈線を挟むように上下各8個の穿孔が見られ、穿孔部の間には、3条から5条の弧線が描かれている。

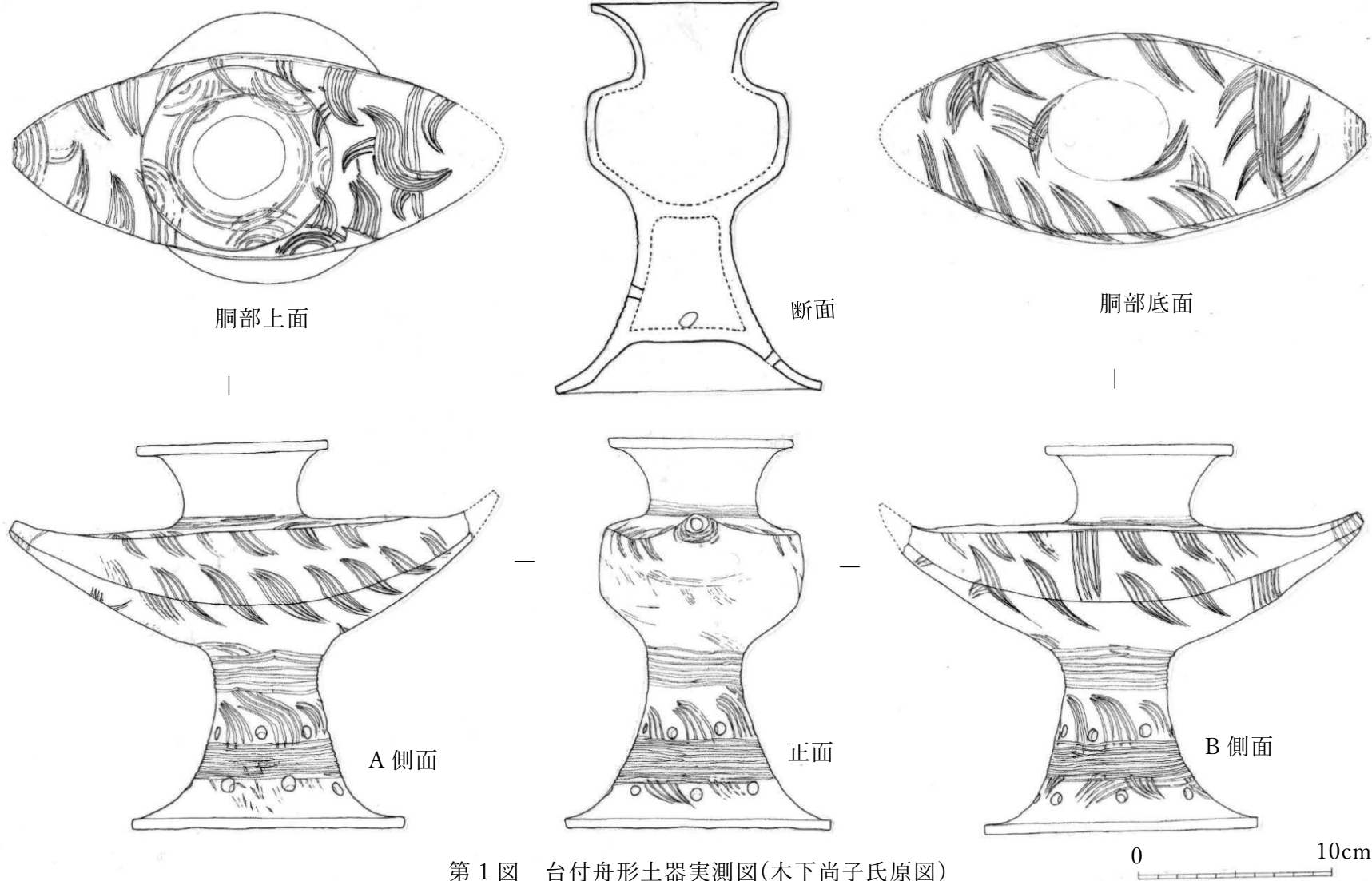
器面の調整は、刷毛目によるが、口頸部内面、胴部上面、胴部下面の一部、裾部を除く脚台部は刷毛目を入念にナデ消したのち文様を施している。そのほかの部位には内外面とも刷毛目が残されたまま文様が描かれている。脚部内面は後に刷毛目による調整を行っている。同底面と胴部の間は空洞になっており、中には土玉もしくは小石が入っており、本体を動かすとカラカラと音がする。

b) 台付舟形土器の創出

台付舟形土器は実用的な器であり、胴部に注ぎ口と思われる穿孔が見られることから、液体を注ぐためのものであることは前述したとおりである。ちなみに台付舟形土器と同時期の土器様式は、弥生土器の一般的な器種である甕・壺・高坏の他に鉢や器台などで構成される。白川・緑川流域や人吉盆地の遺跡では、概して重弧文を施した長頸壺や同文様を施したその他の器種の土器を伴っている。台付舟形土器も口縁部内面に重弧文が見られることから、これらと同一型式の土器に含めることができる。ただこれらの土器は、他の器種に比して一遺跡内における出土数が圧倒的に少なく、免田本目遺跡のように、土壙墓や木棺墓の供献用として使われた例（註2）もあり、日常土器として使われたものではなく、祭祀用もしくは供献用として製作さ

れた可能性が強い。しかるに、台付舟形土器はどのように創出されたものであろうか。そのヒントは、器面全体に描かれた文様にあると推察される。全体に沈線によるS字状の弧線で描かれた文様がみられ、胴部上面には弧線を組み合わせ、やや幅広で深い沈線で強調して描かれた動物様の文様も見られる。これらの文様こそ弥生後期に西日本に分布の広がりを持つ龍を表現したものであると考えられる。龍を器面に描いた土器は、畿内に分布の中心を持ち、東海地方から九州地方に及び西日本に広く分布する。その表現は、具象的→抽象的→記号化へと短期間に変化するとされる。(註3) 台付舟形土器に描かれた文様は、まさしく龍を抽象的に表現したものに他ならない。

龍はBC 6 000年頃に中国東北部で想像されたとされ、その後数千年を経て漢代に龍の形が定型化したといわれる。日本では弥生時代後期前半(紀元1~2世紀)において、新や後漢で鑄造された方格規矩鏡や画文帯神獸鏡が移入され、これらに描かれた龍が絵画土器の原像の一つと言われる。(註4) 龍の絵画土器は、後期に始まったと思われ、大阪府船橋遺跡や池上曾根遺跡から出土した土器に具象的な龍が描かれている。ただ土器に描かれた龍には四足がなく、すべてひれ状の弧線によって表現されているところに中国のそれとは相違が見られる。漢代においては、龍に対する雨ごいが行われていたと思われ、龍は水と深くかかわっていたことがうかがえる。弥生時代に中国からもたらされた鏡の中の龍は、その概念と共に移入されたことが考えられ、我が国においては水神としての龍と共に三角形のヒレ状入れ墨を持つことで海難から逃れたとされる海神のイメージが付加されたとも言われる。(註5) ともあれ龍は、我が国においても水と深いかかわりがあることは言うまでもなく、稲作を生産の基盤とする弥生農耕民にとって、農耕儀礼には欠かせないものであったと思われる。龍を描いた土器も井戸から出土することが多く、日常の暮らしの中で欠かすことのできない水とのかかわりが深かったことがうかがえる。ひいては水稲耕作を生業とする弥生人にとって水は必要不可欠なものであり、水を枯らさないように、あるいは雨乞いとして龍に祈ったのかもしれない。台付舟形土器は出土状況から井戸からの出土とは考え難いが、出土地は弥生稲作に適した湿田地帯が眼下に広がる場所があり、水田を望みながら農耕儀礼が行われていたことが想像される。その際の主要な道具の一つとしてつかわれたと推測することもできる。台付舟形土器は、龍の概念と共に龍の絵画土器が西日本に広がりを見せる中で、祭祀用の特別な土器として創出されたものであろう。



第 1 图 台付舟形土器実测图(木下尚子氏原图)



2-1 台付舟形土器



2-2 胴部上面文様



2-3 胴部下面文様

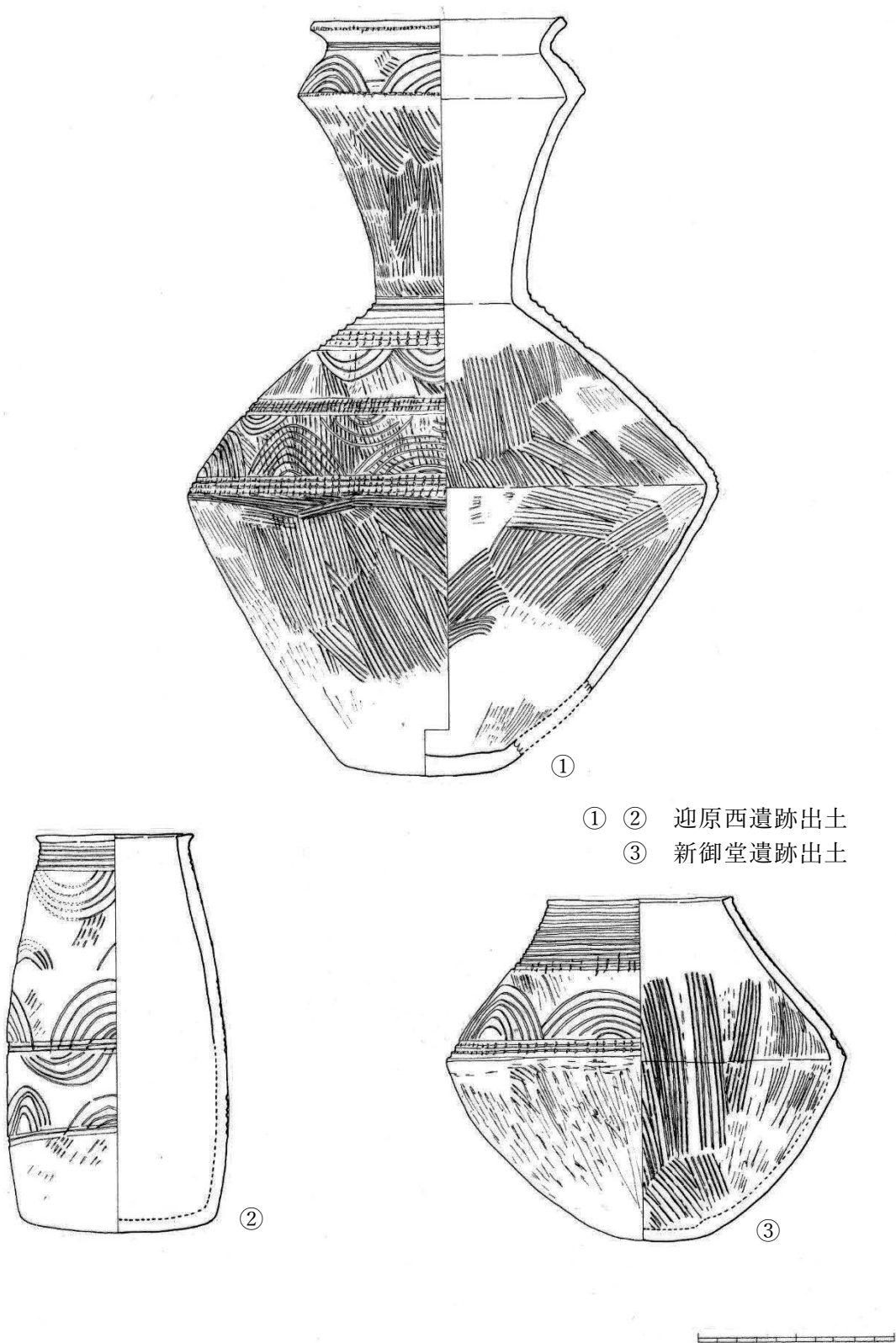
写真2 台付舟形土

3 出土地点と周辺の様相

台付舟形土器の出土地は、採集地に隣接する熊本県下益城郡隈庄町大字宮地字構口（現熊本市南区城南町宮地1 1 1 5番地付近）の畑地と思われる。一帯は現在住宅地となっているが、発見当時は畑地が広がっており耕作中に出土したものであろう。出土地一帯では、小林久雄氏によって弥生時代の遺物が多数採集されており、一帯に弥生人の活動拠点があったことを物語っている。当該地は阿蘇火砕流（A s o 4）を堆積原面とし、各種火山灰の堆積によって形づくられた九州山地の裾から西に延びる中位段丘（通称舞原台地）の西端部に位置する。段丘の縁辺部には開析谷が入り込み、谷頭のいたるところに湧水が見られる。眼下には沖積低地が広がっており、江戸時代に改田が行われるまでは湿田地帯であったことから、水田耕作を生産の基盤とする弥生農耕民の居住空間として良好な場所であったと思われる。このことは、小林久雄氏の収集資料や1990年以降数度にわたって行われた開発に伴う発掘調査によって検出された遺構や遺物からも明らかなどころである。（註6）丘陵全体を見渡せば、前期末（金海式）の遺跡（註7）も存在するが、西端部一帯で検出された遺構・遺物は、弥生中期に始まり、後期末まで継続すると思われる。詳細に述べれば、この地域において弥生人の活動が始まるのは、土器様式（註8）から中期中葉の前半と考えられ、丘陵西北端に位置する今西原遺跡B地点では、同期の大型のもの1基を含む大小7基の甕棺が検出されている。この他丘陵西端部の数地点で同期の土器が採集されている。中期中葉後半には、丘陵西端部一帯に活動領域が拡大されていったと考えられ、全域から同期の遺物が出土する。1999年から2001年に行われた城南町中央土地区画整理事業に伴う宮地遺跡群（西福寺遺跡・新御堂遺跡）の調査（註9）では、中期の竪穴住居跡、甕棺墓や木棺墓・土壙墓、後期の竪穴住居跡・土壙墓等が検出された。同遺跡群の内新御堂遺跡では、後期末まで継続して活動の痕跡がみとめられる。特に環壕が構築された後期前葉から中葉の時期にその規模はピークを迎える。環壕の規模は、調査区のみで延長距離350mをはかり、未確認の部分を含めれば、調査区に隣接する現熊本市南区城南町宮地地区の約8割を包括する総延長距離700～800mに及ぶ大規模なものであったことがうかがえる。台付舟形土器の出土地点もこの中に包括される。環壕は構築後四半世紀を待たずにその役割を終えたと考えられ、その後放置され自然埋没したと思われる。壕内に堆積した埋土は互層をなしており、3分の2ほど埋没した段階で、多量の土器等が遺棄されている状況が確認されている。後期中葉の終わりから後葉の前半の時期と思われ、壕外に集落が見え始める



第2図 台付舟形土器出土地と周辺の重弧文出土遺跡



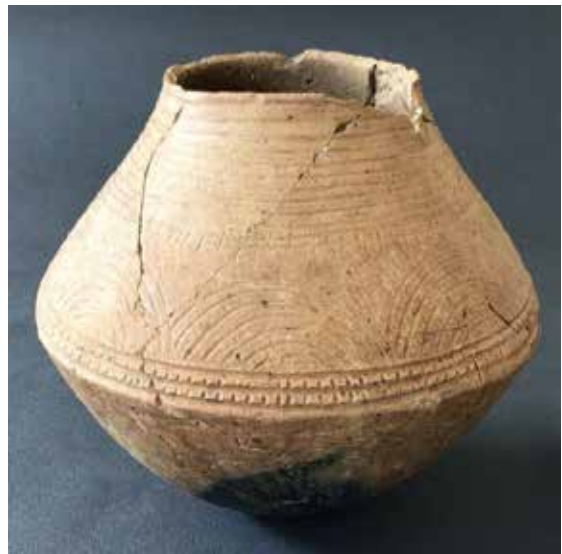
第3図 台付舟形土器出土地周辺の重弧文土器



3



4



5

写真3 台付舟形土器出土地周辺の重弧文土器①



6



7



8-1



9



8-2



写真4 台付舟形土器出土地周辺の重弧文土器②

10



11



12



13

写真5 台付舟形土器出土地周辺の重弧文土器③

写番	出土地	器 種	法量(cm)	特 色	備 考
2	構口遺跡	台付舟形土器	器 高：20.3 口 径：10.0 胴部径：25.5 胴部幅：10.7 裾部径：14.2	<ul style="list-style-type: none"> ・舟形的一端に注口を持つ胴部に、ラッパ上に開く脚台部と口頸部 ・口縁部内面に重弧文、外面全体に横走沈線とヒレ状弧線 ・胴部に15cm×4cmの黒斑 ・底面と胴部間の空洞に土玉 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部の2/3、脚台裾部の2/5 胴部の一部欠損(古写真から推定(写真1参照)) ・色調：黄白色 ・胎土：微砂粒含 ・焼成：良好
3	迎原西遺跡	複合口縁長頸壺	器 高：37.1 口 径：13.0 頸部径：14.6 胴部高：23.4 胴部径：26.9 底 径：7.5	<ul style="list-style-type: none"> ・平底 ・口縁部直下から荒い刷毛目残 ・胴部上半に文様帯刷毛目を残したまま施文 ・頸部から口縁部及び胴部上半に文様帯、横走する凹線及び沈線と重弧文施文によって構成、横走沈線の上からヘラ状工具による刻線 ・二次焼成による焼け焦げ ・黒斑あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部から頸部1/4欠損 ・二次焼成 ・口縁部から頸部一部欠損 ・色調：黄灰色 ・胎土：砂粒少含 ・焼成：良好
4	迎原西遺跡	深 鉢	器 高：19.6 口 径：8.0 底 径：10.0	<ul style="list-style-type: none"> ・平底 ・器面全体が文様帯、刷毛目を残して施文 ・文様は、5条・3条・2条の沈線と4条～7条の重弧文で構成(中央部は弧帯文?) ・胴部中央(2×11.5cm)及び下端から底部(6×4cm)に黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部5/6、胴部1/5欠損 ・口縁部から胴部1/5欠損 ・色調：黄褐色 ・胎土：砂粒少含 ・焼成：良好
5	新御堂遺跡	重弧文無形壺	器 高：16.7 口 径：9.5 胴部径：20.2 底 径：3.5	<ul style="list-style-type: none"> ・丸平底 ・胴部下半ヘラナデ ・12条と4条の横走沈線の間に5～7条の重弧文、上部横走沈線及び下端の横走沈線の上からヘラ状工具による刻線 ・荒刷毛目を残し施文 ・胴部下半に6×8cmの黒斑 ・胴部下半中央部に焼成後の穿孔(1.2×0.6cm) 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部僅欠損 ・色調：黄褐色 ・胎土：砂粒少含 ・焼成：良好
6	新御堂遺跡	重弧文長頸壺	胴部高：21.2 胴部径：22.8 (復元)	<ul style="list-style-type: none"> ・丸底 ・全体丁寧なヘラナデ ・胴部上半に文様帯、27条と2条の横走沈線の間に7～8条の重弧文、横走沈線の上から3箇所へラ状工具による刻線 ・胴部に10×12cm黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴部の1/2のみ残存 ・色調：赤褐色 ・胎土：微砂粒含 ・焼成：良好
7	新御堂遺跡	重弧文長頸壺	器 高：17.3 口 径：10.9 胴部高：11.0 胴部径：12.0 底 径：3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・小丸平底 ・胴部下半・口縁部に刷毛目残(口縁部直下横ナデ) ・刷毛目磨消の後施文(刷毛目一部残存) ・施文は楕状工具 ・胴部に6×7cmの黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴部の一部剥離欠損 ・色調：黄褐色 ・胎土：砂粒少含 ・焼成：良好

表1-1 台付舟形土器及び周辺遺跡出土の重弧文土器観察表①

写番	出土地	器種	法量(cm)	特 色	備 考
8	安幕遺跡	重弧文長頸壺	胴部高：13.9 胴部径：15.7 底 径：2.1	<ul style="list-style-type: none"> ・平底 ・胴部下半に刷毛目残存 ・文様帯は胴部上半、へら状工具により刷毛目をナデ消したのち施文(若干ハケ目残)、上端の細い横走沈線(7条)と下端の重弧文により構成 ・内面に赤漆付着(漆貯蔵壺?) ・胴部上半(7×5cm)、下半(8×6cm)に黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部欠損 ・色調：黄褐色(部分的に赤身) ・胎土：微砂粒含 ・焼成：良好
9	安幕遺跡	重弧文長頸壺	器 高：17.6 口 径：8.5 胴部高：11.1 胴部径：14.8	<ul style="list-style-type: none"> ・丸底(平丸) ・口頸部上半に刷毛目の痕跡。他は磨消 ・施文は、へら状工具使用 ・12条の横線と7~8条の重弧文施文 ・胴部下半に焼成後の穿孔(0.5×1.2cm) ・胴部下半に6.5×5.0cmの黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部僅欠損 ・色調：灰白色 ・胎土：1mm前後の砂粒多(表面摩耗、砂粒露出)含 ・胴部下半に黒斑
10	迎原西遺跡	重弧文長頸壺	残器高：19.2 胴部高：14.2 胴部径：17.3	<ul style="list-style-type: none"> ・丸底(平丸) ・刷毛目を丁寧にナデ消した後施文 ・文様帯は胴部上半、21条と4条の横走沈線の間に5~6条の重弧文、横走沈線の3箇所へへら状工具による刻線 ・胴部下半に10×10cmの黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・後頸部1/2欠損 ・色調：赤褐色 ・胎土：1から3mmの砂粒含 ・焼成：良好
11	宮地出土	重弧文長頸壺	残器高：31.0 胴部高：23.0 胴部径：23.1 底 径：5.0	<ul style="list-style-type: none"> ・平底 ・胴部下半に比較的細かい刷毛目残 ・文様帯は胴部上半、刷毛目を名で消した後施文、20本と3本の横走沈線の間に6~7条の重弧文、横走沈線の4か所にへら状工具による刻線 	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部3/5、胴部1/3欠損 ・色調：赤褐色 ・胎土：0.5~1.0mmの砂粒含 ・焼成：良好
12	囲貝塚	重弧文長頸壺	胴部高：20.8 胴部径：23.2	<ul style="list-style-type: none"> ・丸底 ・全体に刷毛目残 ・文様帯は胴部上半、17条と2条の横走沈線の間に7~8条の重弧文、横走沈線の4か所にへら状工具による刻線 ・胴部下半に8×12cmの黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・後頸部及び胴部1/7欠損 ・色調：赤褐色 ・胎土：微細砂粒含 ・焼成：良好
13	天神原遺跡	重弧文長頸壺	残器高：20.3 胴部高：15.1 胴部径：18.5	<ul style="list-style-type: none"> ・丸底(尖り気味) ・頸部から胴部上半に細かい刷毛目、胴部下半はナデ消し ・刷毛目の上から施文、17条と5条の横走沈線の間に12条の重弧文 ・胴部中央に11.0×11.0cmの黒斑 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部2/3欠損、磨いて新たな口縁部形成 ・色調：黄橙色 ・胎土：砂粒含 ・焼成：良好

表1-2 台付舟形土器及び周辺遺跡出土の重弧文土器観察表②

時期と符合する。(註 10)台付舟形土器や新御堂地区から出土したとされる巴型銅器もほぼこの時期(註 11)に当たり、環濠が破棄された跡もムラは存続していたことがうかがえる。ムラの中に居住していた数グループによって周辺に新しいムラが造られると、その性格は母ムラ的なものへと変化し、地域の重要なまつりをつかさどっていたことが推測される。

おわりに

発見から 80 年以上が経過したが、台付舟形土器について今まで詳細な実測図が描かれたことはなかった。また、見事に完形品のごとく復元された土器について、修復部分の特定には至っていなかった。今回、木下尚子氏によって詳細な実測図が描かれ、小林久雄氏の古写真から修復部分がある程度特定できたことから、所蔵する塚原歴史民俗資料館唯一の研究者として当該土器について執筆することとした。

本稿では、今まであまり触れられてこなかった台付舟形土器創出の意味や時代背景に触れ、弥生農耕民の精神文化を探る一助になればと考える。また、併せて今まで報告の機会がなかった当該資料出土地周辺の遺跡から出土した重弧文土器についても収録することとした。

最後に、本稿を執筆するにあたり実測図を掲載することを快く承諾いただいた木下尚子氏に心より感謝する次第である。

[註]

註 1 山鹿市菊鹿町のうてな遺跡、玉名市の東南大門遺跡、塚原遺跡等で類似の小型土器が発掘されているが、その作りからいずれも実用的な器とは考え難い。東大南大門遺跡ではジョッキ形土器や手捏土器、土製模造鏡などを伴っており、祭祀用に制作されたものであることが推測される。

高木正文 「熊本県七城町うてな遺跡」『日本考古学協会年報』1990

田中康夫 『東南大門遺跡』 玉名市教育委員会 2000

田中康夫他『塚原遺跡 I』 玉名市教育委員会 2017

註 2 佐古和枝他 『本目』第 3 次～第 5 次発掘調査報告書 免田町教育委員会 2001

註 3 合田幸美 「弥生絵画土器の流れと龍」『倭人が見た龍』平成 20 年度冬季特別展図録 大阪府立弥生博物館 2009

- 註4 長野 仁 「海を渡る龍」『倭人が見た龍』平成20年度冬季特別展図録 大阪府立弥生博物館 2009
- 註5 合田幸美 「弥生絵画土器の流れと龍」『倭人が見た龍』大阪府立弥生博物館平成20年度冬季特別展図録 大阪府立弥生博物館 2009
- 註6 小林久雄氏の収集資料に台付舟形土器出土地一帯から多数の弥生時代遺物が採集されている。また宮地遺跡群(西福寺遺跡・新御堂遺跡)の調査では、多数の石庖丁が出土した。
- 清田純一 『小林コレクション I』一城南町東南部(鰐瀬・陳内・沈目・塚原地区)城南町歴史民俗資料館収蔵品目録第1集 城南町歴史民俗資料館 1985
- 清田純一 「肥後における弥生時代遺跡の一様相―城南町宮地丘陵の弥生遺跡について―」『交流の考古学』 肥後考古学会 1991
- 清田純一 『宮地遺跡群』 城南町教育委員会 2002
- 註7 緒方 勉 『沈目立山遺跡』 熊本県教育委員会 1977
- 註8 清田純一 「肥後における弥生時代遺跡の一様相―城南町宮地丘陵の弥生遺跡について―」『交流の考古学』 肥後考古学会 1991
- 註9 清田純一 『宮地遺跡群』 城南町教育委員会 2002
- 註10 台付舟形土器出土地周辺における同時期の遺跡としては、安幕遺跡・囲貝塚・迎原西遺跡・天神原遺跡などがある。これらの遺跡からは、いずれも重弧文を施した長頸壺やその他の器種の土器が出土する。
- 平成5年(1993)に行われた迎原西遺跡の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代後期に及ぶ52基の竪穴住居などが検出された。この内弥生時代の遺物には、土器の他石庖丁・摘鎌・ヤリガンナ・鉄鏃・鉄斧等がある。図3の①(写3)・②(写4)は、火災竪穴住居から出土したものであり、この他にも他の竪穴住居から重弧文長頸壺が出土している。写真4-10は、小林久雄氏によって同地点付近で採集されたものである。
- 註11 島津義昭 「巴型銅器二例」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会 1982